

当たり年のグランプリ

text by Shinji Ishii
文いしいしんじ

モータースポーツに興味のないひとでも、モナコグランプリの名前は知っている。世界で二番目にせまい立憲君主国。人口は三万人だから、僕が住んでいた神奈川県三浦市より少ない。全国民で甲子園へ出かけても観客席はガラガラだ。

グランプリ開催時には、この小さな国に二十万人以上あつまると。道路を封鎖してつくる一周3・3キロの市街地コース。

木曜のフリー走行、金曜はパーティ、土曜は予選、日曜が決勝。競技日程に、パーティ開催日が組み込まれているレースなんてほかにはない。この間、高級ホテルは一週間連泊の予約しかとらない。沿道はバルコニーだけでなく、港に停泊するクルーザーでも、シャンパンのグラスを傾けながら、時速300キロ超のバトルをたのしむ。優勝者は、モナコ公国の大公からトロフィーを受けとる。ヨーロッパ

パ中心、とみなされるF1の世界の、さらにまたど中心がこのモナコグランプリだ。

狭い市街地コースゆえ、追い抜きがしにくく、決勝がはじまってしまえばそうそう派手なバトルは見られない、だから、レース自体は退屈。見ておもしろいのはせいぜい、ドライバーごと一周のタイムを競い合う予選、と普段からそういわれている。ただし、たまに当たり年がある。

2019年のモナコは、当たりだった。レースの直前、一時代を画した元世界王者のニキ・ラウダが七十歳で死去。本人も二度制したことのあるモナコGPは、彼の追悼レースとなった。

チーム・メルセデスの横綱ルイス・ハミルトンもチームカラーの銀色でなく、ラウダといえはこの色、真っ赤なキャッ

ような強引な走りを控え、レースの流れを察知し、みずから三位にさがったようにみえた。

11週目、後方でフェラーリのマシンが大パンク。モナコの路上に飛び散るタイヤカスを拾うため、レースは一時中断。各マシンは差のつかないまのうちに、といっせいにピットに入りタイヤ交換をはかる。上位三台も同時にピットイン。ここで三位のマックスは賭けに出た。メルセデスの一台より早くピットレーンを抜け、ハミルトンの真後ろ、二位のポジションでコースへ滑り出たのだ。

22週目、マックスに、ピットレーンでの追い抜きに関して、レースの総合タイムに5秒加算されるペナルティがいい渡される。ここでマックスの闘争心に火がつく。前に行くのはハミルトンひとり。彼を抜き、そうして5秒以上の差をつけることができれば、ペナルティなど関係なしに、俺はこのレースに勝てる。大公のトロフィーなんかより、よほど輝かしいにかを受けとれる。

ハミルトンはミディアムタイヤ、マックスはハードタイヤ。当然、前者のほうが早く摩耗する。後半のハミルトンはタ

プを被り、ヘルメットにもラウダの名前をペイントした。ハミルトンは最強のチャンピオンだがこのモナコだけはなぜか苦手にしている。

今年からホンダパワーユニットを積んだレッドブルチームは、たぶん「狙っていた」。去年このレースを勝っているし、ホンダのユニットもどんどん進化している。今シーズンのメルセデスは五レース連続のワンツーフィニッシュと、手が着けられない強さを誇っているが、自分たちが勝てるなら、ここしかない、たぶんそう考えていた。

レッドシグナルが緑に変わり、いよいよレースがスタート。

ハミルトンが先行。メルセデスの二台がいつものように一位二位。レッドブルのマックス・フェルスタッペンも三位。現在21歳の若きチャンピオン候補は、以前の

トダジュールの青色に縁取られた熱い時間。モナコにやはり、モータースポーツの女神は住んでいる。疲労困憊しきった優勝者にも、これ以上ないラインをとって走りつづけた若者にも、ばら色の指を差しのばし、汗くさい頬に黄金色の口づけを贈る。

モータースポーツにかぎらず、ただ勝ち負けだけを競うのではない。勝負をこえた偉大さ、人間のはかりしれない可能性をみせてくれるから、モナコグランプリは九十年間、この同じコースで開催されてきたのかもしれない。



モナコ公国

面積: 2.02km²(チカンに次いで世界第2の小国)
人口: 38,400人(2015年、モナコ統計局)
都: モナコ市
語: フランス語(公用語)
教: カトリック(国教)



Profile

1966年大阪生まれ。京都在住。著書に小説「ぶらんこ乗り」「麦ふみクーツエ」「ポーの話」「みずうみ」「四とそれ以上の国」など、エッセイ「人生を救え!」(町田康共著)「熊にみえて熊じゃない!」「選い足の話」、絵本に「赤ずきん」(ほしよりこ絵)など多数。